

ハワイ最初の日本人による新聞 『Japanese Times』の発見

飯田 耕二郎

ハワイで発行された最初の日本語の新聞が『日本週報』であることはよく知られている。古くは例えば『官約日本移民布哇渡航五十年記念誌』（日布時事社、一九三五年）にそのことが言及されているし、昨二〇〇〇年にも、坪井みえ子『ハワイ最初の日本語新聞を発行した男』（朝日新聞社）で、その主人公である小野目文一郎が紹介された。しかし、その第一号が発行されたと思われる一八九二（明治二五）年より以前に、すでに日本人によってハワイで新聞が発行されていた。それが『Japanese Times』である。この新聞の存在については以前から小生は気づいており、すでに「ハワイ・日系キリスト教会の草創期の機関紙」（田村紀雄『正義は我に在り―在米・日系ジャーナリスト群像』社会評論社、一九九五年所収）の冒頭で述べたことがある。そもそも、その存在を知るきっかけとなったのは、ハワイアン・ポー

ド（布哇伝道会社）の月刊紙『THE FRIEND』のVol.45（一八八七年）No.12（二月）の次の記事であった。

「先月の第三土曜日、日本人YMCAの文学・社会の会合での喜ばしい出来事の一つは、（印刷ではなく手書きの）新聞が読まれたことである。これにはニュース記事、広告、通信欄などが掲載されている。この『Japanese Times』の寄稿記事の一つは興味深いので、その発行をこのような欄で取り上げたい。（中略）最小でなく最近の出版事業は『Japanese Times』の出版である。それは四ページ、すべて手書きで、日本人YMCAによって毎月発行されることになっている。最初の号は大変興味深く、文学作品の見事な一文である。」またVol.46（一八八八年）No.3（三月）では、「二月の第三土曜日に日本YMCAは定例の社会・文学の会合をもち、そこで手書きの新聞で

ある英語の『Japanese Times』が読まれた。」さらに同No.5(五月)には「第三週の文学・社会の会合は手書きの新聞を使い、随筆や吟誦文を読んだ。そしてメンバーや招待したゲストに軽い季節のおいしい飲食物が出された。」そして同No.6(六月)にはハワイの英字新聞である『Daily Bulletin』五月二二日の記事を紹介して「クイーン・エマ・ホールの階下の部屋で五月一九日の夕べにひらかれた文学・社会の会合で、手書きの新聞『Japanese Times』が読まれた。編集者・藤田(敏郎)氏が間もなく日本に戻るので、伴(新三郎)氏がその代りをつとめる」(以上いずれも筆者訳)とある。しかし、この後この新聞に関する記事はみられない。

当時の日本人社会の状況を簡単にいえば、一八八七(明治二〇)年は、サンフランシスコ(桑港)における最初の日本人(キリスト教)団体である福音会のリーダーであった美山貫一が九月にハワイにやって来て、日本人への伝道を開始し、一〇月一三日には、クイーン・エマ・ホールで日本人YMCAの開会式が行なわれているので、その直後にメンバーたちによってこの『Japanese Times』は発刊されたものと思われる。したがってその性格も、同人誌のようなものであって、当時の日本人社会に与えた影響もほとんど無かったと考えられる。なお藤田と伴はどちらも当時、安藤太郎がホノルル総領事をしていただき、この直後に安藤夫妻とともに美山牧師より洗礼を受けている。また一八八八年七月には、ハワイで最初の日本人キリスト教会であるメソジスト教会が設立された。

以上のように、『Japanese Times』がこの頃日本人の手によって発行されていたことは分かっていたが、実物が現存しているとは思われなかった。今年(二〇〇一年)一月たまたま、ホノルルにあるMISSION HOUSE LIBRARYというキリスト教関係の図書館(文書館)に、初期の日本人伝道師の手紙が所蔵されているので、それを書写するため何回か通っているうち、図書館にあった目録で同じ場所にあるHawaiian Historical Societyに所蔵されていることを知ったのである。最初はまさかと思ったが、さっそく実物を出してもらい、幻であった新聞を発見して、驚きかつ感激した。所蔵されていたのは二分で第一号(一八八九年四月二〇日土曜日発行)と第二号(同年五月一八日土曜日発行)である。『THE FRIEND』の記事にあるように毎月第三土曜日に発行されたようだが、一八八七年一月が創刊とすると、この間半年ほどのブランクがあったようだ。また新聞は黒インクによる英文の手書きで、何部発行されたか不明であるが、多分この新聞は回し読みされたのではないかと思われる。大きさを計ったところ、一一号は縦四三・四cm・横二八・〇cm(A₃の大きさ)、一二号はその倍の大きさであるが一一号と同じ大きさで半分に分かれていた。一一号は表裏二ページ、一二号は三ページで四ページ目は空白である。いずれの号にも、第一面の左上にC.M.HYDEのスタンプが押してある。今回発見のきっかけとなったHeren G. Chapin『GUIDE TO NEWSPAPERS OF HAWAII』という目録本では、HYDEがこの新聞の編集者としているが、彼はキリスト教の宣教師で、当時ハワ

イアン・ボード(布哇伝道会社)の書記をしており、中国人・日本人・ポルトガル人の教会活動を支援していた。その関係で彼の手元に新聞が残り、それが他のコレクションとともにHawaiian Historical Societyに収まることになったものと思われる。したがって、編集者は彼でなく、やはり前記の藤田や伴など日本人のメンバーが編集にあたったのであろう。

さて肝心の新聞の紙面については、まずノートに筆写したが、小生がハワイから帰国する少し前に友人である写真家の原寛氏が運良くホルルに来たため、彼に全ページ撮影してもらった。掲載写真は二号分の各表紙(第一ページ)を合わせたものである。内容については、両号とも最初にSummary of News(ニュースの要約)とあり、日本の様々なニュースを取り上げている。まず第一号では東京市の改良計画が内閣で考慮中であること。外国砂糖会社が神戸に五万円の本資で設立されること。築地にある盲目・聾啞者の保護施設の生徒が増加したため現在の建物が小さすぎて上野に引越すこと。芝の仏教寺院の僧侶が貧しい子供達を教育する学校を設立する計画であること。一月中に大阪造幣局で発行された金貨と銀貨の発行高についての報告など。そして一面から二面にかけて、一八八八年度における日本のキリスト教各宗派の教会数・受洗者数・信徒数についてのH.Loomis牧師の研究の詳しい紹介記事があり、最後に二月一日に横浜で起った異常気象についての記事がみられる。第一二号は短い雑報記事はなく、大きな記事が三つのみである。まず第一面はアメリカと日本との間の

条約改正に関する毎日新聞の記事の紹介。第二面の終わりから第三面、第三面の初めにかけてが日本における長老教会派の第一二回年報から同教会派の教勢を紹介するもの。最後はシンガポール・フリー・プレスのマニラ特派員が、フィリピンと日本の貿易を促進するため磁器や刃物類など日本の美術工芸品が到着したことの記事である。このように日本の宗教界、特にキリスト教関係を中心とした社会情勢の記事のみで、文芸に関する記事はみられない。

なお、海外の日本人が発行した新聞としては、一八八六年にサンフランシスコで発行された『しのかめ』というのが一番古いとされ、これは一五年ほど前に日本の群馬県で実物が発見されたが、『Japanese Times』はそれに次いで古く、ハワイでは間違いなく最初のものだと考えられるが、それが二部も現存していたことは大きな喜びである。